しもは木々をすっかり銀色にぬりつぶしました。それから二人が北風にいっしょに住もうと言ったので、北風がやってきました。かれは毛皮をまとい、庭で一日中ほえたけり、えんとつのけむり出しをふき飛ばしました「ここは、いごこちがよい場所だ」かれは言いました。「雲にも来るように言わなくちゃな」そして雲もやってきました。毎日三時間、雲はしろの屋根をがたがたいわせ、とうとう屋根をふいたスレートをほとんどこわしてしまいました。それから雲

はできるかぎりの速さで庭のまわりをぐるぐる走りまわりました。雲ははい色の服で、はく息は氷のようでした。「どうして春が来るのがこんなにおそいのだ」と、まどぎわにすわり、白く冷たい庭を見ながら、わがままな大男は言いました。「天気が変わってほしいものだ」しかし春はまったくやって来ませんでした。夏も来ません。秋が来ると、どこの庭にもこがね色の果実が実りましたが、大男の庭ではまったく実りがありませんでした。「この大男はわがまま

すぎるんですもの」と秋は言いました。ですからこの庭はいつでも冬で、北風と、雲と、しもと、雪が木々の間でまいおどっておりました。ある朝、大男がベッドで目を覚ますと